脅威と驚異としてのアメリカ
――日本の知識人・文学者の戦中日記から――

菅　原　克　也

一般に「ハナハト読本」と略称される第三期国定教科書は、大正7年（1918年）から昭和7年（1932年）の間に小学校に入学した児童たちが学んだ教科書である。つまり、この教科書を学んだ世代は、昭和16年（1941年）の日米開戦時に二十代から三十代前半を迎えた、いわゆる戦中派世代に属するということになる。まさにアメリカとの戦争を戦った世代である。

この第三期国定教科書『尋常小學國語讀本』巻八に「アメリカだより」という読み物が収められている。アメリカを旅行する父が、サンフランシスコ、シカゴ、ニューヨークの三都市から、留守宅の子どもたちに宛てた手紙という体裁を取る、アメリカ案内記である。その、ニューヨークからの便りに、以下のような条りがある。

> アメリカ人は大きいこと、廣いこと、高いこと、早いこと、何でも世界一になるやうに心掛けてゐるといひますが、何しろ大した勢です。[1)]

年少の児童に与えられる国語教科書の記述が、敢えてステレオタイプを志向したであろうことは十分に想像できる。型としての外国文化を教えることで、ある文化のイメージを鮮明なものとして記憶させようとの配慮が、教科書の執筆者には働いていたであろう。だとするならば、ここにあるのはアメリカという異文化について、その特質をよく要約すると想像されたイメージであったはずである。同時に、年少の児童の向上心に訴えるかたちで、アメリカとの対抗心を煽ろうとする意図も、そこには働いていたかもしれない。ともあれ、初等教育における教科書記述が人間に及ぼす影響の大きさを思うなら、このようなアメリカ・イメージを胸に刻んだ日本人たちが、やがては銃をとってアメリカと戦ったのだ、ということになる。

大きいアメリカ、広いアメリカ、高いアメリカ、早いアメリカ。文明の物質的な側面を表すこれらの表現が、昭和16年（1941年）の日米開戦により敵国となる国の属性として日本人たちが想像した、中核的なイメージであったということになる。そして、アメリカの物質文明、その量的規模という、素朴ではあるが本質をなすと考えられたアメリカ・イメージが、日本人のアメリカ観の大きな部分を支配していたことを、ここにあらためて確認する必要があろうかと思われる。それは巨大なものの脅威と、巨大なものへの驚異という、同じ根に発しながら方向を異にする、複合的な反応を日本人たちから引き出したであろう。すなわち、脅威と驚異という同音異義語で表されるものが、一方で、圧迫を加える

---

1) 文部省『尋常小學國語讀本』巻八（［復刻版］池田書店、1970年）、73頁。巻八は四年生用の教科書である。

ものへの反発として反米的態度を醸成し、他方で強者への帰依としての親米的態度につながる双頭のイメージとして、日本人たちに受けとめられていたことを、まずは予想することができるように思うのである。

さて、本稿において、こうした物質的巨大さのイメージを帯びたアメリカを、具体的に考える手がかりとして取りあげるのは、日米開戦から日本の敗戦までに書かれた、知識人、文学者たちの日記である。なかでも、他を圧倒する分量を持つ、伊藤整（1905-69）の日記である。

小説家としての伊藤を一言で形容すれば、英米の新しい小説の動向をいち早く日本文壇に伝えようとした、いわゆる西欧型の知識人・文学者であったということになろう。一般には、猥褻か否かを問われた裁判で、社会的注目を浴びた『チャタレー夫人の恋人』（1950年刊）の訳者として知られているはずである。そのような、西欧文学の影響をたっぷりと身に浴び、英語にも堪能であった伊藤整は、昭和16年（1941年）12月1日から、昭和20年（1945年）8月24日まで、十八冊の大学ノートに膨大な日記を残した。これが死後、次男の伊藤礼氏によって発見され、三巻本として新潮社から刊行された、上下二段組み1000ページを超える『太平洋戦争日記』である。

日記を読みはじめてまず印象づけられるのは、軍人を父に持つ伊藤整が、日本の戦勝を素直に信じ、祈っていたこと、アメリカを敵として強く意識し、日本側の軍の動きに強い関心を寄せていたことである。そのあたりは、同じ西欧型の知識人・文学者でも、反俗、反社会的な隠棲的態度から一貫して軍部を罵倒しつづけた、永井荷風（1879-1959）の日記『断腸亭日乗』などとは著しい対照を示している。荷風は、たとえば本稿で触れる空襲の被害について「東京府民の被害は米国の飛行機よりも寧日本軍人内閣の悪政に基づくこと大なりといふべし」と書く。軍部への反発をまず筆にする荷風は、敵としてのアメリカをそれほど強くは意識しなかったかにみえるのである。ただし、荷風の日記にみられる態度を、当時の日本の知識人一般の態度を代表するものと考えることができないのは、ここに改めて言うまでもない。事実は、伊藤の日記に見られる口吻こそが、多くの知識人たちの思いを集約したと考えられるのである。[2)]

伊藤は、職業生活や家庭生活の雑多な出来事に揉まれつつ、新聞やラジオの報道に日々細心の注意を払い、戦果を記録し、戦局を占おうとする。太平洋での日米の戦い、およびヨーロッパ戦線に関する伊藤の記述は詳細をきわめ、一国民が記した太平洋戦争の記録として稀にみる質の高さと、量的充実を示している。伊藤は、昭和16年12月8日の真珠湾攻撃以降の、緒戦における連戦連勝の勢いを心から喜び、味方を気遣い、「米英」を敵視し、戦争の遂行を支える天皇の威光を讃美する。たとえば、昭和17年1月28日の日記には、

---

2) アメリカを明確に敵として意識する文学者の日記の例として、たとえば斎藤茂吉の日記をあげることができる。茂吉の反米意識は戦後も一貫する。昭和20年9月30日、昭和天皇がGHQにマッカーサーを訪問した（9月27日）記事に目をとめた茂吉は「今日ノ新聞ニ天皇陛下ガマツカアサーヲ訪ウタ御寫真ノツテヰタ。ウヌ！　マツカーサーノ野郎」と記す。

> 大ミイズに依る、というのは、たとえばハワイの海戦のような戦果が、何を信ずる人間によって為されたか、ということ也。天皇陛下のために死ぬという信念が為したのだ。それがそのまま大ミイズの現れである。[3)]

というような記述が見られるのである。「御稜威」といった語彙に寄り掛かる、軍国日本の表現空間に浸りきった記述を読む限り、昭和23年（1948年）に一部が公開されたこの日記に対し[4)]、戦後、伊藤自身による大幅な補訂の手が入った可能性を顧慮する必要はないであろう。その厖大な分量からしても、これは伊藤の戦中の記載をほぼそのままに再現した日記なのだと考えてよいはずである。

さて、ほぼ毎日克明に戦局の動きを記録してゆく伊藤の日記に、このアメリカとの戦争の本質的性格というべきものについての記述がしきりにあらわれはじめるのは、太平洋戦争の大きな転換点となったガダルカナル撤退以降のことである。周知のように、この頃から、日本軍はアメリカの大規模な反攻の動きに圧倒されてゆく。連合艦隊司令長官山本五十六の戦死、アッツ島玉砕といった出来事のあった昭和18年の伊藤の日記には、次のような感想が書きとめられる。

> 万一、日本人のこの精神力、国民総力集中の戦が、物質文化の力によるアメリカに勝てないとしたらと思うと、倫理的なものの価値を私たちは信ずることができなくなる。存在の深淵である。[5)]（昭和18年7月8日）

伊藤は、日米戦争を日本人の精神力とアメリカの物質文化の対決であると捉える。アメリカ文化の本質をなすものが物質であると規定した上で、これに圧倒される日本の精神的価値に危機感を覚えるのである。伊藤がここに言う「倫理的なもの」とは、精神のありかたを中心に見すえて生きようとする態度が持ちうる、人間的価値の謂いであろう。物質の面で対抗することの難しいアメリカを敵として、精神力を以て戦っている戦争において、仮に勝利が難しいとするなら、自ら拠ってたつべき精神的基盤が失われかねないとの強い危機感が語られるのである。このような精神力を恃む生き方、すなわち戦時において国民的規模で強いられた生き方と、量を恃む物質文化の力のぶつかりあいを、伊藤は次のように端的に表現する。

---

3) 伊藤整『太平洋戦争日記』一（新潮社、1983年）、52頁。この記述には「得能感想」との前書きがあり、これが伊藤自身をモデルとする彼の小説作品『得能物語』のメモとして残されたらしいことが分かる。ただし、『得能物語』（『得能五郎の生活と意見』続編、1942年12月河出書房刊）は、日米開戦のラジオ報道を得能が耳にするところで終わっている。

4) 伊藤礼による「校訂者あとがき」によれば、この日記の昭和16年12月1日と8日の項が「戦時日記抄」と題して、昭和23年5月『文壇』に掲載された。伊藤整『太平洋戦争日記』三（新潮社、1983年）、346頁。

5) 伊藤整『太平洋戦争日記』二（新潮社、1983年）、13-14頁。

敵の巨大なる鉄火にむかっているのは大和民族の血液である。[6]（昭和18年9月2日）

ここにいう「巨大なる鉄火」が表すのは、伊藤自身のことばによれば「物質力」、「物質生産力」、「輸送力」、「補給力」、「土木工事力」等々であり、「物の量と人の数」であり、「彼の誇る量の戦闘」であり、「物質文化の量的な開花」である。物質文化の面での日本とアメリカの差は歴然としている。そして、この物質の力によって、アメリカは戦争を戦おうとしている。「巨大なる鉄火」と戦う日本は、民族の血液によってこれに対抗するほかない。それは一人一人の人間の生命であり、生命の代償によって贖われる民族としての誇りであり、それらが持つ精神的価値である。伊藤はこう書く。

アメリカは弱い構成を持った国家である。しかし彼等は軍艦をも、飛行機をも次々と巨大な量で生産し、それによって圧倒してしまうことに力点をおいている。[7]（昭和18年11月10日）

「弱い構成」とは、日本の国家体制に対比されるアメリカの政治体制を指すであろう。こうした表現の裏には、日本が一つの求心力によって束ねられる「強い構成」を持った国家であるとの伊藤の自負が透けて見える。ただしアメリカには、その「弱さ」を補って余りある生産力がある。アメリカが「力点」を置くのはそこであり、そこにこそアメリカの強さがある。伊藤はこうも書く。

生産の量、物質の量が、戦争を決定して行くとは考えたくない。しかし、我がその敵の物量に押されて、じりじりと退き、血を流し、船を失っている事実は動かすことが出来ぬ。[8]（昭和19年2月1日）

この戦争を支えていたのは、日本の精神力であり、それを信じうる倫理的価値であったはずである。それが、どうやら次第に物質の量の力に圧倒されかねない形勢である。何が勝敗の帰趨を決定するのかという点について、判断を誤っていたと考えたくはない。ただし、事実はその見通しの甘さを、否応もなくつきつけてくる。戦争というものについての価値観じたいに揺さぶりをかけてくる。そう感じる伊藤は、ヨーロッパと太平洋の戦局において、精神が物質の前に敗れつつあるかにみえる事態を前に、やがてこんなイメージをもちはじめる。

鉄と油とアルミとの量が着々とこの戦を決定的に進めて行っている。アメリカは、まるで片手で日本を押しながら、片手でドイツを殴るような横着な戦争の仕方をしている。［……］とにかくそういうことをさせるのは、彼の物の力である。物の力こそ怖るべきものである。[9]（昭和19年6月19日）

---

[6] 同上書、69頁。
[7] 同上書、173頁。
[8] 同上書、252頁。
[9] 伊藤『太平洋戦争日記』三、37頁。

力任せに「横着な」戦い方をするアメリカ。片手で日本を押し返し、もう片方の手でドイツを殴りつけるアメリカ。ここに至ってアメリカは、その巨大な物質の量ゆえに、物の力、物の量を体現する巨人として、擬人化されたイメージを帯びる。「弱い構成」を持っていたはずのアメリカ、優勢な工業生産力の展開を示すにすぎなかったアメリカが、いつしか一人の巨人としてのイメージによって語られはじめる。それは、人間の軍隊が戦うべき相手として、あまりに巨大すぎる。伊藤が、ほとんど悲鳴のようにして次のように書くとき、巨人としてのアメリカは、巨大な機械のような存在となる。この巨人は、肉体を持った人間が巨大化したものというより、巨大な機械のごとき巨人として感じられるのである。

> まるで敵は軍隊ではなくて機械である。戦闘ではなくして無限の生産力の展開である。肉体をもって相争うには、あまり巨大なる鉄と火薬の量の誇示である。鉄の波であり、殺人器械の行進である。[10]（昭和 20 年 1 月 25 日）

巨大な殺人機械としてのアメリカは、肉体を持った人間が立ち向かいうる存在では、もはやない。精神力と対比される「物質」としてのアメリカは、一歩踏み込んで「肉体」のレベルをも超えた存在として立ち現れるにいたる。それは無限の力を秘め、ひた押しに押し寄せてくる波のように巨大な鉄と火薬、「巨大なる鉄火」であり、機械である以上、人間としての意志や意図を超えたところで動き、襲いかかってくる相手なのである。

伊藤が、このような言葉を書きつけていた昭和 20 年（1945 年）、日本はアメリカによる大規模な都市爆撃にさらされていた。昭和 19 年（1944 年）11 月 24 日、東京がはじめて本格的な爆撃に見舞われた日、[11]アメリカの爆撃機は、まず次のように伊藤の目に映っていた。

> 薄く雲が出ている中を、敵機も、我方の戦闘機も白く雲を噴いて飛んでいる。我方の飛行機も幾台か見えたが、敵機のいるあたりで戦っているのが見えない。敵機は大きい故、かなりはっきりと形が見えるが、よほどの高空を飛んでいるので、その高さまで我方の飛行機は達しないようにも見えた。[12]（昭和 19 年 11 月 24 日）

B 29 という飛行機が代表するアメリカの爆撃機は、日本の戦闘機が容易に近づくことのできない高高度を悠々と飛行し、夜はサーチライトの光のなかに銀色の機体を曝して、大量の「鉄火」をまき散らしていた。木造家屋が密集していた東京の街を焼き尽し、多くの人間の生命を奪ったこの爆撃機は、精神のレベルも肉体のレベルも超えたアメリカという存在を、その巨大さを、まさに体現するものであったはずである。[13]

---

[10] 同上書、233 頁。

[11] 周知のように、東京にはじめてアメリカの爆撃機が飛来したのは、昭和 17 年（1942 年）4 月 18 日のことである。

[12] 伊藤『太平洋戦争日記』三、170 頁。

[13] アメリカの飛行機が、なによりも巨大なものとしてイメージされていたことを証言する、ややユーモラスな例として、海野十三による以下の日記の記述を挙げることができる。「後刻、陽子が学校より帰って来て、真赤になって敵機が落ちた事、それが途中で空中分解してばらばらになった事を話す。私が『本当にあれは敵機か』と真剣に訊けば、陽子は『だってずいぶん大きい飛行機だったんですもの』『そうか、よし、よし』と、私は大機嫌であった。」橋本哲男［編］『海野十三敗戦日記』中公文庫（中央公論社、2005 年）、32 頁。

そして、それは美しくさえあった。3月10日未明に行われた、東京の東部地区への未曾有の空襲のありさまを、たとえば清沢洌（1890-1945）は、その著名な『暗黒日記』のなかで次のように描いているのである。

> 警報でめざめる。けたたましく大砲がなる。外に出ると、B 29が低空飛行をやり、探照燈に銀翼を現わし悠々と飛んでいる。盛んに高射砲を打つが、少しも当らず。我飛行機は一台も飛び出しておらぬ。B 29は、フックリ空に映えて実に綺麗である。[14]

長い滞米経験をもち、戦時中もリベラルな姿勢を一貫させたジャーナリストとされる清沢は、この日、東京南郊の自宅から北の空が真赤に燃えているのを目撃する。この時は「どこか知らねど被害が多かろう」と胸をいためるばかりだったが、翌朝都心に出た清沢は、酸鼻を極める状況を目にし、慄然とする。およそ一週間後、清沢は「日本は何故にこの惨状――婦女子、子供を爆撃せる事実を米国に訴えざるか」と書くのだが、[15]そのような爆撃の惨害に対する義憤を書きとめる一方で、B 29というモノそのものへの審美的感想を残していることに、注意する必要があるだろう。清沢は、空襲による人的被害に関する理性的判断とは別のところで、アメリカの飛行機の絵画的映像に、いわば反射的な感慨を引きだされている。そこに、アメリカという対象が帯びうる本質的なイメージにつながる要素を読みとることは、十分に可能であろう。清沢は、およそ一ヶ月後の4月15日の空襲の際にも、次のように書きとめるのである。

> 星はあるが暗い夜。従来の敵機と異なって、今夜は頭上をしばしば通る。［……］敵機の落す爆弾が、暗のとばりに紅蓮の炎を浮き立たせた。B 29は銀色で、それが探照燈の光を浴びて絵のようだ。[16]

そして、アメリカの爆撃機を「きれいだ」と書きとめた日本人は何人かいた。たとえば高見順は、昭和20年4月7日の日記に次のように書いていた。

---

[14] 清沢洌『暗黒日記』（岩波文庫、1990年）、283頁。

[15] ただし、この3月19日の日記の記述の前後関係には留意する必要があろう。引用の箇所を含む部分は次のようである。「深川、本所の惨状は、聞けば聞くほど言語に絶するものあり。陛下昨日罹災地を御巡幸遊ばさる。日本は何故にこの惨状――婦女子、子供を爆撃せる事実を米国に訴えざるか。かれらは焼いた後を機銃掃射をやったとのことである。もっとも、日本も重慶、南京その他をやり、マニラについても讃められぬが、米国のやり方は非道許すべからず。」（『暗黒日記』、302頁）。4月15日の以下の記述も参考になる。「この火事を見、この火事と戦って、僕は何か憎くて痛憤した。怒り心頭に発すというのはこの事だろう。しかしそれが、ただ『米国』という敵だけではないようだ。僕は盛んに『米国の奴め、癪に障る』といった。それには明らかに、人に聞いてもらいたいためのせりふが交っていた。『親米的』といわれはしないかという懸念から、特にそうした点を強調するのである。だが、何かに対し憤りを感じなかったというのならば明らかに嘘だ。『こんな戦争をやるのは誰だ』と、僕はこの愚劣な政治と指導者に痛憤していたのである。」（同322頁）。同様の記述は4月28日の日記にもある。ただし、4月30日の日記には「米国飛行機の東京都その他の民家焼き払いは、不必要なる惨苦を国民に与えるもので、何と言っても罪悪である」（同331頁）との記述がある。

[16] 清沢『暗黒日記』、321頁。

敵機大編隊来襲、翼をキラキラと光らせて頭上を行く。「堂々たる」編隊で、まるで自国の空を行くような跳梁振りだ。[……]「敵ながら、きれいね」と妻が言った。[17]

高見が用いる「堂々たる」という形容詞と、高見の妻が用いる「きれい」という形容詞は、ことばの用法における男女差を表すのみで、両者はほぼ同じことを言っているのであろう。「跳梁」という表現には、アメリカの飛行機が示した存在感と、その姿によって高見が感じた脅威の感覚も十分に感じとれる。それは「敵」以上の何かとして、直に人間の感覚に訴えかけるものを有していた。たまたま同じ日（昭和20年4月7日）に、同じ編隊を同じ鎌倉の頭上に仰いでいた大佛次郎も、次のように書くのである。

七時警報出て九時近く敵数十機頭上を通り行く。碧空にダイヤモンドの如く煌めき見事なり。[18]

ダイヤモンドのようにきらめくアメリカの爆撃機。その美しさの発見を、一つの得難い経験として語るのは、戦後、東京大学総長となる矢内原忠雄（1893-1961）である。昭和12年（1937年）、反軍、反戦の言動のため東京大学を追われた矢内原は、昭和14年以降、自宅で土曜学校を開講し、アウグスチヌス、ダンテ、ミルトンを講じた。このうち、ダンテの『神曲』講義（第九十四講、天国篇第三十三曲）において、矢内原は次のように空襲の経験について語るのである。

お話したかもしれないが、十二月三日の午後空襲があった時に、私の見たのはB 29が五機編隊で東京の上空を飛んでいました。その中の最後の一機に日本の戦闘機が群れて行ってこれを攻撃しているのを見たのですが、非常に美しい。あれが空襲でなかったならば非常に美しい。戦争であることを忘れるくらいに美しかった。光のB 29が金色に輝いて光り、周囲に日本の戦闘機の姿が小さいものですから、光の薄い形の小さなのが上へ下へと飛んでいる。ダンテの天国篇の或る場面を連想せしめるに足りたのです。これは空襲の大きな贈物の一つ。[19]

ダンテの描く天国の光景に擬せられる空襲の光景と光り輝くB 29。このB 29は、その背後にあるアメリカという存在、空襲下の日本人の運命を握るその巨大な力ゆえに、神話的なイメージすら帯びていた。土曜学校講義と平行して続けられていた聖書講義において、矢内原は、ヨハネ黙示録に注解を加えつつ、次のようにも書くのである。

我らに取りて一機のB 29はヨハネの見た鷲にまさりて、同じ神の御言を伝へた。数編隊の敵機が引続き来襲した後、B 29一機が偵察の為め上空高く悠々飛翔して、爆

---

17) 高見順『敗戦日記』（中公文庫、2007年再版）、153頁。

18) 大佛次郎『大佛次郎敗戦日記』（草思社、1995年）、185頁。

19) 矢内原忠雄（矢内原伊作・藤田若雄編集）『土曜学校講義（七）ダンテ神曲Ⅲ天国篇』（みすず書房、1970年）、729頁。ただし、このテクストは聴衆の筆記によるものである。

音高く我らに対ひ「地に住む者どもは禍害なるかな。禍害なるかな、禍害なるかな、尚数編隊の来襲あるによりてなり。」と告げたのである。その時人々は防空壕より匍ひ出で無気味なる予告の中にも一瞬の息抜きに安きを盗んで己が罪を悔改めず、ただ神を信ずる者のみは静かに神に依り頼みて、神の審判の進行を祈の中に見守つたではないか。空襲の経験は黙示録解釈の目を開いてくれたことだけでも、我らに取りては益を為したのであつた。[20]

B 29は、飛行機と鳥との形態的類似によって、黙示録中の鷲に喩えられる。矢内原によれば、鷲は「敵」とも「聖徒」とも解釈されうるのだが「鷲が敵を意味するにせよ、聖徒を象徴するにせよ、神はすべての被造物をば神の意志を宣言する器として用ひ給う」[21]と考えなくてはいけない。したがって、東京の上空に飛来したアメリカのB 29の爆音は、まさに「神の御言」を地上の人間に伝えたのだ、ということになる。それは、この後もさらに地上に災禍がもたらされることを告げるのだが、「神の審判の遂行は地に住む悔改めぬ者に取りては禍害であるが、天に昇る聖徒たちに取りては慰謝である」[22]以上、信徒は祈りのなかにB 29を仰ぎ見たのだ、と矢内原は言う。空襲が止んだつかのまの間、防空壕から出て一瞬の息抜きに「安きを盗ん」だ日本人たちへの、かすかな苛立ちすら感じさせる一節に、空襲の光景に黙示録の世界を垣間見ていた矢内原の思いの強さが読み取れる。

ここに見るように、B 29が体現したアメリカは、地上の人間に神（God）の「御言」を伝える存在にすらなっている。伊藤整が、半ば絶望しながらイメージした「巨大な鉄火」としてのアメリカ、すなわち殺人機械としての巨人は、その物質的な巨大さのゆえに、人間のレベル、肉体のレベルを超えた、終末論的（apocalyptic）なヴィジョンを喚起するものとして立ち現れるにいたるのである。[23]

このような、一種神話的イメージで語られるアメリカは、戦後の文学のなかにも流れ込むことになる。たとえば、東京の蒲田地区を舞台に、アメリカによる空襲と、空襲を生き

---

[20]『矢内原忠雄全集』第9巻（岩波書店、1963年）、464頁。矢内原の講義の箇所は、黙示録第八章十三節の「地に住める者どもは禍害なるかな、禍害なるかな、禍害なるかな、なほほかに三人の御使の吹かんとするラッパの声あるに因りてなり」“Woe, woe, woe, to the inhabitants of the earth by reason of the other voices of the trumpet of the three angels, which are yet to sound!” (King James Version) に加えられた注解のなかに見える。

[21] 同上書、463–64頁。

[22] 同上書、464頁。

[23] このほか、アメリカのB 29を美しいと感じ、そのことを書きとめた文学者の例として、谷崎潤一郎が挙げられる。「一機東京を目指して飛ぶ、高く高く鰯雲の中にあり、爆音に依りて敵機なること判明［……］機體もスツキリしてゐて美しきこと云はん方なし［……］時に又敵の一機［……］素晴らしき速力にて後ろに曳く飛行機雲の線が見る見る青空の中を太陽の方へ伸びて行く、そしてその伸びつゝある尖端にわづかに飛行機の黒點を望む、全く戦争と云ふことを忘れさせる美しき見物なり」（「疎開日記」昭和十九年十一月二十四日）『谷崎潤一郎全集』第十六巻（中央公論社、1968年）、354–55頁。［引用にあたり、踊り字を繰り返し表記に改めた。］また、以上のような例を一端とする、東京の空襲に対する日本人の反応について、筆者は以下の論考で論じたことがある。SUGAWARA Katsuya. “Great Bearer: Images of the US in the Writings of the Air Raids,” *Comparative Literature Studies* (Penn State Univ.), 41:4 (2004).

延びる男女を描いた、坂口安吾（1906–1955）の「白痴」（1946 年 6 月）は、アメリカ軍に翻弄される日本人たちの姿を、

> よそ見をしてゐる怪物に大きな斧で殴りつけられるやうなものだ[24)]

と表現する。これは「横着な戦争の仕方」をすると伊藤整が評した、あの片手で敵に対する巨人としてのアメリカ・イメージを彷彿させる、ほとんど不注意のうちに人間の生死を決定する無気味さ、酷薄さを湛えた怪物である。そして、この巨大な存在、人間の運命をおそるべき規模で左右するアメリカについて、三島由紀夫（1925–70）は『金閣寺』（1956 年）のなかで、次のように描くことになる。

> 昭和十九年の十一月に、B 29 の東京初爆撃があつた当座は、京都も明日にも空襲を受けるかと思はれた。京都全市が火に包まれることが、私のひそかな夢になつた。[……] 私はただ災禍を、大破局を、人間的規模を絶した悲劇を、人間も物質も、醜いものも美しいものも、おしなべて同一の条件下に押しつぶしてしまふ巨大な天の圧搾機のやうなものを夢みてゐた。ともすると早春の空のただならぬ燦めきは、地上をおほふほど巨きな斧の、すずしい刃の光りのやうにも思はれた。私はただその落下を待つた。考へる暇も与へないほどすみやかな落下を。[25)]

B 29 の爆撃を期待する小説中の人物、やがて金閣寺に放火するこの修行僧は、巨大な「天の圧搾機」「巨大な斧」としてのアメリカを思い描く。人間的規模を超えた、人間の思考をすら超えた、巨大な、無慈悲な存在としてのアメリカ。目の前のものを美醜によって選別する手間さえ省いて、すべてをひとしなみに押しつぶすアメリカ。予告なしに、だが必ず襲いかかる力としてのアメリカ。そのようなアメリカを、戦時下のこの修行僧は夢想する。

こうした「大破局」「人間的規模を絶した悲劇」は、矢内原がなぞらえた黙示録の世界に通じる。それは、人間の運命を押しつぶしてしまう巨大で峻厳な力としてイメージされ、それ故にこそ「すずしい」と感じられる刃の輝きを放つ。圧搾機の刃が頭上から落下する時、地上の人間は、その意味について考える暇すらない。それは、鬱屈した（小説中の）人間の生を、破局という形で開放する力を持つ。それ故にこそ、B29 による空襲、アメリカという存在がもたらす運命が、修行僧の夢想の対象となるのである。

こうした巨大な存在としてのアメリカ。大きいこと、大きくあろうとすることに本質的な性格をあらわすアメリカ。大きいがゆえに、他に及ぼす影響が、その運命を左右する存在となるアメリカ。戦中、戦後をアメリカの影の下に生きた人々のなかに、このようなアメリカを思い描いた日本人たちがいたということを、ここに確認することができるであろう。彼らがイメージとして抱いていたのは、まさに脅威と驚異という同音異義語によって表される感情と反応を引きだす、巨大なアメリカであった。

---

24)『坂口安吾全集』04（筑摩書房、1998 年）、75 頁。

25)『決定版三島由紀夫全集』 6 （新潮社、2001 年）、54–55 頁。

思えば、1853年７月８日（嘉永６年６月３日）、江戸湾口に現れたペリー提督率いる黒船を目にした日本人たちも、鎖国の平和に対する脅威に戦くとともに、近代技術の粋を集めた巨大な船と大砲とに驚異の目を見張っていた。たとえば、幕末の思想家であり砲術家であった佐久間象山（1811–64）は、いちはやく浦賀に駆けつけてアメリカ船を観察し、外夷の脅威に十分な警戒を示しつつ、ふと「船の結構よりして、いかにもきらびやかなる事に御座候。」[26]（佐久間象山「望月主水宛書簡」嘉永６年６月６日）と、感嘆の声を挙げていたのである。それは、砲術家としての象山が、アメリカ船の構造、装備が示す技術力に対し素直に敬服し、モノとしての船の華麗さに自らの感性を揺すぶられたことを示す言葉であったろう。「東洋道徳、西洋藝術」[27]を唱えることになる象山は、「西洋藝術」すなわち西洋の（アメリカの）科学技術の脅威に圧倒されるとともに、これに対する驚異の念に心を躍らせていた。日本人たちが最初にアメリカと接触した場面において、脅威と驚異という同音異義語が表す、両面価値的な反応をアメリカに対して示していた、これもまた一つの例である。

日本人がアメリカに対して抱くイメージの中核には、こうした脅威と驚異の感情と反応が伏在する。そうであるなら、わが身の生存を脅かしかねない巨大なアメリカに対する反発が「反米」という感情に結びつき、その巨大さにおいてわが身の水準を超える存在への驚異の念が、アメリカに対する憧憬を生み、やがては「親米」感情につながるのだ、と考えることができるように思われる。すなわち、否定的にも肯定的にも傾く振幅の大きな反応を、アメリカという存在は引きだしてきたように思われるのである。つまり、「反米」は「親米」と背中合わせの感情としてありうるのではないか。そのような問いを、ここに投げかけてみたいと思うのである。

---

[26]『渡辺崋山／高野長英／佐久間象山／横井小楠／橋本左内』日本思想大系 55（岩波書店、1971 年）、343 頁。

[27]「東洋道徳、西洋芸術、精粗遺さず、表裏兼該し、因りてもつて民物を沢し、国恩に報ゆる…」（「省䆮録」）。同上書、244 頁。